

12月20日(月)7時15分ごろ、学校の駐車場について東の空を見ると、鮮やかな朝陽が空を真っ赤に染めていました。しばし見とれた後、ふっと振り返ると西の空には満月が。これまた引き込まれて見とれてしまいました。

昨夜の満月はどんな様子だったのだろうか、校長室にてスマホで検索。すると、19日(火)の満月は何と今年最後の満月で「コールドムーン」ということがわかりました。その満月に、今年最後の満月に、間もなく沈みゆく前に出会えたということになります。満月には密かパワーがあり、何らかの幸運をもたらしてくれるとのこと。どんな幸運にあやかれることでしょうか。

仕事運か金運か、いやいや、学校に何らかの幸運をもたらしてくれるはずだと信じて待ちたいものです。



「心に沁み入る言葉」

今年も残りわずかとなりました。この1年を振り返ると、実にさまざまなことがあったことを想起します。当然、コロナ禍の中での生活を規制しなければならなかったことは外せません。学校においてもいくつかの行事が中止や変更を余儀なくされ、生徒には窮屈な思いをさせてしまいました。本当に申し訳なかったと思います。

1年を想起する中で、心揺さぶるような、あるいは、心の支えとなっただいくつかの言葉の存在があります。「心に沁み入る言葉」あるいは「魔法の言葉」と言っていいかもしれない。そんな言葉を綴ってみます。

■「ありがとうございます」

この一年間で最も口にし耳にした言葉であろうと思います。感謝の気持ちを伝える常套句であり最大限の表現であることは間違いありません。気持ちの込め方で言い回しに変化が生じ、受け手の受け止め方も変わってきます。一説によると、「有り難う＝有り難い＝めったにないこと」、生命の誕生の奇跡を指し、生まれてきたことへの感謝の気持ちを表す言葉だとも言われるそうです。

想いのこもった“ありがとう”は、琴線に触れ、心を和ませ、内面を活性化させてくれるような気がします。人として必ず備えておきたい言葉であり、心に沁み入る一番の言葉であると思います。

■「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

とても信頼できる人がいます。困難にぶち当たったとき、解決の糸口がつかめないとき、愚痴を聞いて欲しいとき…、今年も何度か相談させてもらいました。一通り話を聞いていただいたのち、その人は決まって「だいじょうぶ、あなたなら乗り切れます、だいじょうぶ」と言ってくださいました。実は、この言葉を聞きたいがために相談し

ているようなものかもしれません。納得し、次を見始めている自分がそこにいます。その人の“だいじょうぶ”は、私にとって救いの言葉、まさしく「魔法の言葉」のようなものです。

■「明日死ぬかのように生きよ。永遠に生きるかのように学べ」

この言葉は、インド独立の父と言われるマハトマ・ガンジーの言葉ですが、スピードスケートの小平奈緒選手の好きな言葉としても知られているそうです。数年前にメモしていたものを最近読み返しました。沁みますねえ。人間の命は限りがあります。明日がどうなるかなんて、誰にも分らないことです。一日一日、そのときそのときを大切に思うことは難しいことなかもしれませんが、ときにこの言葉を意識できる時間が長ければ、生きることに意味を見出せる気がします。

■「人を叱る3つのコツ ①現行犯で叱ること ②古いことを持ち出さないこと ③しつこく叱らないこと」

6月ごろ、ある雑誌で目にしました。アーティスティックスイミング日本代表コーチ・井村雅代氏の言葉です。「叱る」と「怒る」の違いはどこにあるかということ、教育的かどうかという観点にあると思います。つまり、「叱る」は感情的な行為ではないということです。だから、「叱る」ことで奮起する人もいれば、意気に感じて成長の糸口にする人もいます。ただし、井村氏の指摘通り、3つのコツをもって「叱る」ことが肝心なことなのです。

この1年の「心に沁み入る言葉」を振り返ってみました。ほかに、「待ってたよ」とか「いいねえ、輝いてるねえ」などもあるのですが…。